

邦楽器による

makino yutaka

2005年4月25日(月)

開場 PM6:00 開演 PM6:30

abc会館ホール(芝公園)

牧野由多可

作品展

そのV

追悼

主催／牧野由多可先生を支援する会
後援／(財)ビクター伝統文化振興財団
大日本家庭音楽会
(株)邦楽の友社
(有)邦楽ジャーナル

ごあいさつ

牧野由多可先生を支援する会 代表 砂崎 知子

「牧野由多可作品展」は、2001年に、第一回目を朝日生命ホールで開催いたしましたから、本日は第五回目の記念演奏会となる予定でした。しかし、思いもかけず、1月29日牧野由多可先生は突然ご逝去されました。この演奏会を楽しみにしておられた先生の心中を思う時、さぞかしご無念であったことと涙を禁じ得ません。もっとお元気で、そして今日の演奏会を聴いていただきとうございました。出演者の皆様も、同様のお気持ちと拝察いたします。

第一回目から、ご厚意によりご出演をいただきました多くの方々に、あらためて心から御礼申し上げます。また、この演奏会にお運びいただきました大勢の方々、関わりを持って下さいました皆様に、厚く御礼申し上げます。

牧野先生は、皆様の温かいお心を持って天国へ旅立たれたことと信じております。そして、先生のお姿はなくなっても、数々の名曲は、これからも燦然と輝き、更に多くのファンを増やしていくに違いありません。私共「牧野由多可先生を支援する会」は、いずれ名称を変えて、先生の残された作品の普及の為に何らかのお手伝いをさせていただきたいと考えております。これまで以上に皆様方の暖かいご支援を賜りましたら、大変嬉しく力強く存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。本日のご来場誠にありがとうございます。

牧野由多可氏を偲んで

上野 晃

昨年夏の、旭日小綬章受章の祝賀会と同じここ椿山荘にて、本日の牧野由多可先生のお別れの会が開かれることになりました。

牧野さんが生まれた昭和5年（1930年）には、当代日本の作曲界の柱石たるコンポーザーの多くが、呱呱の声を上げています。

牧野さんが、変貌の著しい、少しも目の離せない作曲家だったとは、多分誰の目にも映らないでしょう。が、彼の50年におよぶ作曲歴は、やはり平坦とはとてもいえませんし、いくつかの節目を数えることが出来ます。しかしながら、大河のように流れ、推移していくこの作曲家の創造の営みは、勿論さまざまな発想、多彩な手法、そして各種の境域にわたりながら、大きな持続をなして来たのが判ります。

山田耕筰直門の牧野由多可、という触れ込みが、異聞のように思われましたのは、耕筰門下の多士済々が、牧野の親の世代に当たるくらい離れているためでしょうが、牧野さんは、中学時代初めころより、この高名な作曲家の薫陶を得ていました。師の山田耕筰は、ほとんど西欧の作曲家と同等に見做された、最初の日本の作曲家であります。そこでの日本と西洋音楽のリレーション（関連）が、しかし牧野由多可では、洋楽から日本音楽という可逆の像で見えて来るのです。つまり、師匠の西欧化に対して、弟子の日本化という還元を示しています。

22歳でNHK管弦楽作品懸賞募集に入選した交響曲、続いて翌年の芸術祭で文部大臣賞受賞のピアノ協奏曲など、大型のオーケストラ作品を次々と成功させた1950年代、そして60年代に入るやいなや、オペラのジャンルに手を染めます。忽ちにして4作品が生まれますが、それらは、狂言や能に題材を求めて作曲、日本舞踊が導入されたり、能楽堂で上演されたりしました。さらに、宮城会や宮城合奏団からの委嘱作品が知られるようになり、〈邦楽四人の会〉のために書いた1964年作「茉莉花」、菊地悌子の十七絃で初演された65年作「十七絃独奏による 主題と変容『風』」によって、まさに〈現代邦楽〉の魁（先駆け）となりました。

十七絃から二十絃箏、尺八や横笛は当然、三絃、胡弓、琵琶、鼓・・・と、牧野さんはあらゆる邦楽器に対象を向けました。しかし彼は、作曲のために邦楽器をインストルメント（道具）として利用するのではなく、楽器の血脈を探り、そのエートスを再発見するごとくに、作曲を仕上げ、楽器のほうから～奏者のほうから～作品を語らせるのです。彼のピアノの先生に、レオ・シロタ、井口基成、豊増昇といった、当時の大家の名が並びます。なかでも豊増先生からは、ピアノよりもバッハを学んだように思われるのです。牧野さんのうちに宿る古典への憧憬と工匠的な創造精神は、ここから培われたのかも知れません。

日本の音楽社会のいまや揺るぎなき二元的併立—— 私たちはいつも、邦楽と洋楽を左右兩岸に見て、音楽の河を航行しなければなりません。牧野由多可先生のお別れの会に際して、私がいま一度反芻させられるのも、このような現実の風景やシーンでした。これからも牧野作品とは、しばしば遭遇するに違いありません。いつまでも私たちをお見守りください。

（平成17年3月1日 牧野由多可先生お別れの会にて）

牧野由多可先生を偲んで

邦楽プロデューサー 水野 好子

今年は殊のほか天候不順で、雪も多い冬でございました。桜の訪れも遅く悲しい知らせも多い昨今で、今年こそは「牧野由多可先生を支援する会」にも、是非一曲加えさせていただこうと、昨年ご受章祝賀会のときそのお話をしたら「あ、まだマネージャーやっているの」とおっしゃるので「先生、まだ（河）が残っていますよ」等との会話も空しいものになってしまいました。宮城喜代子先生からのご紹介で色々曲を作っていただき、大きな財産となっております。今回出演させていただく曲は先生とのお交際の第一作目、日本の心「桜と花と月と」でございます。最初にママさんコーラスの練習に立ち合わせ、余りのひどさに驚かれたのか、「あの人たちにボイストレーナーはついていないの？」とそーっと聞かれました。責任者と話し合い、いまだにその方にお世話になり何よりの励みとコーラスを楽しんでいるグループになっております。もしあの初演の時、牧野先生のアドバイスがなかったら今の千代田レディースアンサンブルは存在しなかったと思います。その後、日本の心シリーズも「山田耕筰のうた」「海」「芭蕉布」「山」と続きます。ソロのところを必ず入れてください。沢井忠夫と山本邦山に演奏させますので。とお断りしておりましたので別段と難しく苦勞しましたが「支援する会」の砂崎知子・石垣清美のお二人がソロを弾いてくださるので、何時も私のプログラムに入れることが出来ます。先日、金沢でのオーケストラとのジョイントコンサートの時も、お二人に行ってもらい山本邦山氏の尺八で大好評でした。

この日本の心シリーズは何時までも人に愛され大事にされることを確信しております。追悼となってしまったこの会に、先生との出会いの曲を選んだことも何か感じさせられます。そしてこの6月、今、正派関東支部の「もう一つの力を・・・」という演奏会をいたしておりますが「花舞」をプログラムに入れました。昨年12月に決めてあったことですが、責任者の私としては、心から感謝と追悼の意を込め進行したいと思っております。

牧野由多可先生を偲んで

元東京芸術大学邦楽科教授 矢崎 明子

牧野先生は、本日の「第五回牧野由多可作品展」を待たずに旅立たれてしまいました。今日演奏させていただく「三曲落葉松」は、昭和63(1988)年森の会の委嘱により初演以来、舞台にかけるのは5度目となりました。今度こそ先生によるこんでいただける演奏をしたいと、練習を始めた矢先の悲しいお知らせでした。「三曲落葉松」には、以前から大変に思いをよせておられたご様子でした。本当に残念でなりません。

先生と私の最初の出会いは、私が邦楽「4人の会」に所属しておりましたときです。邦楽「4人の会」は創立以来、洋楽系の意欲的な作曲家に、次々と作曲委嘱を行っておりました。昭和39(1964)年の第九回定期演奏会のために牧野先生に作曲を委嘱し、先生が邦楽器を使った初めての作品、四重奏曲「茉莉花」が誕生いたしました。牧野先生独特の大変激しく、強烈で新鮮な感覚におどろきました。むずかしいテクニックに苦労したことを覚えております。

先生のすばらしい作品の中でも、私が特に心ひかれるのは、やはり唄のある曲です。昭和42(1967)年初めて唄ものとして書かれた曲が「萩原朔太郎の詩によるうた二題 1、笛 2、蛙よ」です。初演の折、先生は「洋楽に現代歌曲があるように、現代邦楽のための“うた”を作りたい。器楽を中心とした作品が現代邦楽の大半をしめてしまっていることに、私はどうから不思議を感じていたのである。日本の音楽のもっている最もすぐれた遺産である唄物、語り物の精神、独特なすぐれた日本の発声のために積極的に曲を書かなければならない」と強くおっしゃっておられました。

北原白秋の詩による「三曲落葉松」も新しい三曲の創造を目ざして作曲され、先生は「大変素直な気持ちで書きました」と話して下さいました。詩人の叙情と詠嘆を、水墨画のように淡彩に描きだしております。

先生の作品は、情感が豊かであり、エネルギーッシュな中にも、香り高く心に沁み入る名曲ばかりです。練習には何度でも立合っ下さり、熱のこもったご指導をいただいたことを忘れることはできません。先生がお亡くなりになってみますと、曲に対する思いが一層強く、深くなってゆくのを覚えます。

先生は、邦楽器を使った後世に残るすばらしい作品を多く作曲され、「現代邦楽」の発展に多大な貢献をなされました。

音楽は、多くの人々に演奏されて育ってゆくと言われます。先生の作品をみんなで大切にし、次代にひきついでゆかなければ、と覚悟をあらたにしております。

この道にたずさわっている私達のために沢山の名曲を残して下さいましたことに感謝し、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

プログラム

1. 夜想曲と舞曲 (1982年)

ピアノ 永井 恵子 十七絃 松本 俊子 尺八 藤原 道山

2. 箏協奏曲Brillante (1992年)

安藤政輝と箏グループ輝 〈かがやき〉

箏独奏 安藤 政輝

第一箏 安藤 珠希 戸塚 朋華

第二箏 長谷川 愛子 山崎 忍

十七絃 石井 まなみ

3. 三曲落葉松 (1988年)

三絃 矢崎 明子 小暮 玲子 多田 美保 岡村 愛 瀧口 舞衣子

箏 早川 智子 郷司 雅子 細川 英子 新井 智恵

尺八 武田 旺山

4. 日本の心「桜と花と月と」(1989年)

指揮 ないとう ひろお

尺八 難波 竹山

沢井忠夫合奏団

箏独奏 石垣 清美

第一箏 宮崎 孝子 中山 いずみ

第二箏 川村 昌子 松村 エリナ

十七絃 井原 潤子 和久 文子

合唱 千代田レディースアンサンブル

ソプラノ 赤松 千枝子 阿部 京子 岩城 葉子 緒方 久子

瀬在 喜代江 中平 理恵子

メゾソプラノ 市川 静江 大森 ひさ子 岡田 喜久子 島原 寿子

斎藤 桂子 進藤 重子 福島 洋子 藤 和子

アルト 河崎 紀子 神崎 悦子 塩月 京子 外山 由紀子 林田 洋子

5. 北海道民謡による二重奏曲 (1969年)

箏 石垣 清美 尺八 難波 竹山

6. 追善曲 ～立原正秋詩集「光と風」より～

能楽堂・救世観音 (1978年)

歌 友淵 のりえ 第一箏 砂崎 知子 第二箏 石川 憲弘 十七絃 松坂 典子

曲目解説

1. 夜想曲と舞曲 (1982年)

「牧野先生の思い出」

私が牧野由多可先生のお名前を知ったのは「琉球民謡による組曲」で、最初に聞いた時、体中が震えるような感動を覚えたことを思い出します。その後、宮城会のコンクールに初めて「弥勒の御代」という拙い曲を出させて頂いたことがきっかけで、吉川英史先生の紹介状を頂き、牧野先生に師事を仰ぐことになり、五十の手習いで作曲の勉強を始めました。

初心者の私に、ABAという形で短くても良いから自分で作るように、とわかりやすく教えて下さり、数曲民謡を編曲してみるようにとヒントを頂いたことから、九州民謡をアレンジしコンクールで秀位を頂きました。その後も「天竜紀行」他数曲で入賞も果たせるようになりました。一つのフレーズから次に移る時のつながりが難しく困っている時、先生が二、三小節入れて下さるだけで、曲に命が吹き込まれたようになっていくことが毎回不思議な感動でした。ご自宅に伺うたびに、お母様お手製のお菓子でもてなしを頂いたことも含め、今思えば勿体無いような贅沢な時間でした。

ちなみに私からの委嘱作品「荒城の月幻想」では、私と長女・俊子が指導していた高校まで出向いて丁寧にご指導下さったお陰で、生徒達が生まれ変わったように生き生きと演奏出来るようになり、全国大会の舞台で好評を博することが出来ました。

本日演奏される「夜想曲と舞曲」は、私から先生に「ピアノと十七弦と尺八で曲を作って下さい」と特にお願ひして作って頂いた思い出深い作品です。「作曲者は楽譜を書くだけで、誰かが演奏してくれないとどんな曲だかわからないから」とおっしゃり、次女・永井恵子のピアノ発表会に於いて初演の折や、私の発表会での再演の折にもわざわざ会場まで足を運び、聴いて下さる優しい先生でした。

先生はこの世を去られました。残された素晴らしい曲達は大事に後世まで伝えられることと思います。先生のご冥福を心よりお祈りし、ご挨拶に代えさせていただきます。 松本ゆき子

2. 箏協奏曲Brillante (1992年)

1992年安藤政輝と箏グループ輝〈かがやき〉委嘱作品。

安藤政輝が主宰する箏グループ輝〈かがやき〉は、1987年に結成され、5人のメンバーの年齢は10代から20代という、当時としては若いメンバーで演奏活動を重ねておりました。第4回公演に牧野先生がお越しになり、その後作品の委嘱をお引き受け下さいました。グループ名「輝」をイタリア語訳し作品のタイトルとしてくださり、メンバー同様に若々しい印象が織り込まれている作品で、第5回公演にむけて練習を行っていましたが、初演の機会を得ず時が過ぎました。それから13年の時が経ち、本日ようやく初演となります。

作曲当初の牧野先生が抱かれたBrillanteのイメージに近づくよう、精一杯若々しく演奏させていただきます。 安藤政輝と箏グループ輝〈かがやき〉

＜箏協奏曲「Brillante」(ブリランテ)について＞

独奏箏と、第一箏 第二箏 十七絃よりなる合奏群との箏協奏曲である。Brillanteとは〈輝かしく光彩を放って〉との音楽用語で、華やかに活気のある作品である。若い人達に楽器編成の上からも気軽に演奏してもらえようという意図をもって書いた。しかし技術的には決してやさしいものではなく、若々しいわかりやすい曲想の中にも現代的な表現が沢山入っており、曲は四つの部分に別れている。

(作曲者)

3. 三曲落葉松 (1988年)

<解説>

この作品は新しい現代に於ける、三曲の創造を目ざして作曲したもので、1988年“森の会”の委嘱によるものである。

曲は白秋の詩の世界にさそわれて、叙情があり、詠嘆がある。そして東洋風なさびと美が水墨画のように浮かび上がってくる。

詩人と作曲者は共に落葉松の林の中をさまよう一時を持つこととなった。

(「牧野由多可の音楽～邦楽器の文化を創ったパイオニア～」より)

<歌詞>

「落葉松」 北原白秋 作詞

- | | |
|---|---|
| 1 からまつを過ぎて
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。 | 2 からまつを林を出でて、
からまつを林に入りぬ。
からまつを林に入りて、
また細く道はつづけり。 |
| 3 からまつを林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨 <small>きりさめ</small> のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。 | 4 からまつを林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。 |
| 5 からまつを過ぎて、
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり。
からまつとささやきにけり。 | 6 からまつを林を出でて、
浅間嶺 <small>あさまね</small> にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつをまたそのうへに。 |
| 7 からまつを林の雨は
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつを濡るのみなる。 | 8 世の中よ、あはれなりけり。
常なれどうれしかりけり。
山川に山がはの音、
からまつにからまつのかぜ。 |

4. 日本の心「桜と花と月と」(1989年)

<解説>

1990年1月、NHKホール 初春三曲名流選 のために「さくら」「花」「荒城の月」を組曲ふうにつないで、カデンツァ部分などを大幅に加えて作・編曲されたもの。

日本の心シリーズの第一作目の曲で、ママさんコーラスの人々に邦楽器の魅力を知ってもらおうという意味を持って作られたもの。

プロデューサーとして最初の出会いの曲で、牧野先生に心から捧げたい。

水野好子

<歌詞> 現代日本の歌曲集『閨山房』より

さくら (日本古謡)

さくらさくら やよいの空は見渡すかぎり
かすみか雲かにおいぞいずる
いざやいざや見に行かん

花 (武島羽衣作詞・滝廉太郎作曲)

春のうららの隅田川 のぼりくだりの船人が
權のしずくも花と散る ながめを何にたとうべき
錦おりなす長堤に くるればのぼるおぼる月
げに一刻も千金の ながめを何にたとうべき

荒城の月 (土井晩翠作詞・滝廉太郎作曲)

春高樓の花の宴 めぐる盃かげさして
千代の松が枝わけいでし むかしの光いまいずこ
秋陣營の霜の色 鳴きゆく雁の数見せて
植うるつるぎに照りそいし むかしの光いまいずこ

5. 北海道民謡による二重奏曲（1969年）

牧野先生のお姿を最初に拝見したのは、1977年の「桐韻会」の演奏会でした。沢井先生宅の内弟子として上京し、はじめて出かけたその演奏会の終曲「カプリチオ」、今も目に耳に焼きついています。お尻をキュッ、キュッと振りながら指揮をなさる先生のお姿と共に、その曲の素晴らしさに感動し、帰ってから興奮の中で沢井先生にお伝えしたことを思い出します。その後、沢井先生と合奏団の皆で「カプリチオ」をはじめとして牧野先生の曲を何度か演奏させていただき、牧野先生ともお話させていただくようになりました。

邦楽音心会の15周年の演奏会に「協奏舞曲」という箏・尺八の複協奏曲を書かせていただき、何度もご指導いただきました。河口湖での夏季合宿にもお出かけくださり、本番では指揮もお願いしました。普段はやさしく穏やかな先生が、曲の練習に入ると「もっと速く!! もっと激しく!! 激して、激して!!!」と興奮なさり、びっくりしたものです。会員とも親しくお話して下さいました。その年の10月、武蔵嵐山での恒例いも煮会に一升瓶を2本抱えて来てくださり、どんぶりでお酒を酌み交わし、楽しいひと時を過ごしました。

今日演奏させていただきます「北海道民謡による二重奏曲」は、征山と二人で年4回のペースで9年間に渡り続けた熊谷守一美術館でのコンサート（同じ豊島区にあり、時には奥様ともお出かけいただいたことをなつかしく思い出します）で二重奏曲を探していた時、「こんな曲もあるヨ」と楽譜を下さいました。二人ともすっかり気に入ってしまい、それ以来、各地で何度も演奏させていただいた想い出深い曲です。追悼となりましたこの演奏会で演奏の機会をいただけたのも、牧野先生のお導きのよう感じます。一生懸命演奏させていただきます。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

石垣 清美

<解説>

この曲は、北海道の民謡の代表であり、尺八にとっても重要なレパートリーの一つである「江差追分」と、箏を活躍させることができるであろう「ソーラン節」を取り上げて、両方の奏者の技術を縦横に駆使し発揮させながら楽しい作品となっている。

曲は「江差追分」の幅の広い曲趣に始まり、尺八が雄大に歌う中を箏がそれをささえながら、時に自由に又激しく、海や波を暗示する動きを示しながら進んで行き、やがて遠くから活気のある「ソーラン節」が聞こえてきて、次第に大きくふくらみ変化を重ねて行き、尺八と箏とが激しくもみ合って競いながら曲の頂点へとたたみ込んで行く。

6. 追善曲 ～立原正秋詩集「光と風」より～能楽堂・救世観音（1978年）

牧野先生と初めてお会いしたのは、昭和43年頃、私の歌の師匠である故平井澄子先生のお宅だったと思います。又、当時私は邦楽4人の会の後藤すみ子先生にも御指導いただいております、お二人の先生が牧野先生と御親交深くされておられたことから、牧野先生からお声をかけていただくようになりました。牧野先生は常々、日本の伝統音楽は「語りもの」が重要な地位をしめてきたことから、現代の声楽作品を創作しなければならないとおっしゃって、私の歌への道を力強くリードして下さいました。本当に有難く思っております。

7年余り前のある日突然、牧野先生が脳梗塞で倒れられ、お一人で大変困っておられるという助けを求める電話がありました。砂崎さん達と支援の会を作り、先生のお世話をさせていただくようになりましたが、当初は様々な事が先生の身边で起こり、精神的にもかなりのダメージを受けておられました。作品展を開催してからは、年毎に生気が甦ってこられたことは、支援する会一同とてもうれしく思っておりました。先生が楽しみにされておられた5回目の作品展を目前にした時、突然帰らぬ人となってしまわれるとは思ってもみず、今でも信じられない思いです。

本日、追善曲として「能楽堂」と「救世観音」をさせていただくことになりましたが、この曲は昭和53年に作曲していただき、作詩の故立原正秋先生（作家）にも絶賛していただいた思い出深い曲です。牧野先生の声楽曲では「動」と「静」の対比の曲が多く、この二曲も一対となっております。前者は激しい女の情念を、後者は救世観音に、女手ひとつで慈しみ育て音楽の秀でた才能を引き出し、最大の理解者であり、生涯の心の支えであったお母様の淑やかな凛とした美しいお姿を重ねられたのではと思っております。

先生は、声楽の分野でも日本語の美しさを生かしたすばらしい作品を数多く作曲され、現代邦楽の中で、声楽曲を作曲される貴重な作曲家でもありました。絶筆となった最後の作品は、スケールの大きな声楽曲「水仙考」でした。

今後は、先生の遺された秀逸な声楽曲を、多くの方にお聴きいただき、若い演奏家の方々に演奏していただけるよう、非力ながら力を注いで参りたいと思っております。支援する会のメンバーで、この曲を先生の御霊に捧げ、御冥福をお祈りしたく存じます。きっとこの会場のどこかで、最愛のお母様とお二人でお聴き下さっておられると思います。友渕のりえ

<解説>

日本の伝統音楽を考える上で特に重要な地位をしめるものは「語りもの」と言われる、その声楽作品です。

新しい「日本のうた」を作ろうと考えて居るものにとっては、こうした先人達の築いた資産を受けついで次の時代の創作に活かして行こうと考えるのは当然の事とおもいます。私の作曲家としての立場もそうです。

友渕さんは演奏家としての立場から常にそうした点に鋭い関心を持って「日本のうた」を唄ってこられた貴重な人材の一人です。今までにも、もう私の歌曲作品を数回リサイタル等でうたってこられました。年毎にその発声や表現に研究のアトがうかがわれ心強くおもって居りました。



さて今年は彼女のために新作を書くことになりましたが、私はここでさらにもう一段の飛躍を期待して今までよりもっと大きな劇的表現力と密度の高い感情移入とを求めて作曲しました。

詩は立原正秋氏の詩集『光と風』の中から私がとくに作曲したいと思っていた「能楽堂」と「救世観音」の二つです。

前者は生々しく、はげしい女の情念の表出を、後者は人生を達観した静寂さと、さびしさ、そのさびしさの中にただよう、ほのかなぬくもり、この二つの対照的なドラマがどのように演じられるでしょう。

何事にも熱心で妥協がなく、ねばり強い友渕さんのことです。私は大きな期待をもって見守って居ます。

（昭和53年10月「友渕のりえ日本の唄第4回リサイタル」プログラムノートより）



*The Arts of
Makino Yutaka
2005. April. 25*

